19.

外傷性後頭蓋窩硬膜外血腫（PFEDH）８例の検討

（霞ヶ浦：脳神経外科）
○稲次忠介、伊沢仁之、山田裕二、河合秀彦
賀川　潤、伊東良則

後頭蓋窩硬膜外血腫（Posterior fossa epidural hematoma ：PFEDH）は、比較的稀な頭蓋内損傷である。当施設において1988年６月から1997年3月までに8例のPFEDHを経験したので報告する。症例は、４歳から４９歳（平均１８歳）。男性：２例、女性：６例。受傷機転は、交通外傷６例、転落２例であった。来院時のＧＣＳは、６～１５（平均：１３.１）、Lucid interval が見られたのは２例のみであった。頭蓋骨骨折は、７例にみられた。後頭蓋窩に限局する血腫は1例のみであり、他の７例はテント上の血腫も合併していた。頭部以外の外傷が見られたのは２例であり、頚椎骨折、骨盤骨折などであり、いずれも軽微な損傷である。治療は３例に開頭血腫除去手術を行い、他の５例は保存的に経過観察を行った。予後は、ＧＯＳで全例ＧＲであり、予後良好であった。以上について、若干の文献を交えて、考察する。

20.

脳出血、ラクナ梗塞における頚動脈および下肢動脈病変の検討

（東京医大老年科）
○李　瑛、岩本俊彦、杉山　壮、高崎　優

目的：脳血管障害の中で高血圧性脳出血とラクナ梗塞は、共に穿通枝と呼ばれる細小動脈の血管病変より生じることが知られている。一方、超音波検査法(US)は頚動脈や四肢動脈の血管病変を非侵襲的に評価することが可能である。そこで脳出血例、ラクナ梗塞例あるいは危険因子を有する例における血管病変の広がりをUSを用いて臨床的に検討した。

対象と方法：対象は何らかの神経脱落症状を呈し、CT/MRIにて脳出血と診断された16例、ラクナ梗塞94例で、本検討ではラクナ梗塞例が脳出血例より高齢なために年齢を調整した45例を用いた。同様に対照には、画像は正常であるが危険因子(高血圧/糖尿病)を有する34例(危険因子群)と健常の34例(健常群)を用いた。全例にBモード超音波断層法およびAnkle Pressure Index(API)測定を施行し、頚動脈病変、下肢狭窄性病変の検索を行った。頚動脈病変は閉塞、プラーク（内膜-中膜複合体の厚みが2.1mm以上の限局性隆起性病変）を以て陽性とした。

結果：1) 背景：脳出血群の平均年齢は67.5歳で、被殻出血、視床出血が各々8例あった。全例高血圧を有し、高脂血症は有意ではないが、ラクナ梗塞群より少なかった。2) US所見：頚動脈病変の頻度は、健常群(20.6%)に比してラクナ梗塞群(49.9%)、危険因子群(41.2%)で有意に高く、特に両側性の頚動脈病変が多かった。しかし脳出血群の頚動脈病変の頻度は43.7%で、いずれの群の間にも差はみられなかった。3) API所見：APIは脳出血群1.02、健常群1.05で、ラクナ梗塞群(0.97)、危険因子群(0.97)より高かったが有意差はみられなかった。

結論：脳出血の例数が少なかったことを考慮に入れると、脳出血、ラクナ梗塞における動脈病変の広がりは、健常群より広範であったが、特にラクナ梗塞群や危険因子群で目立っていた。